

続 櫻の木の下で (26)

阿木津 英



去る五月十二日、中野サンプラザで、外塚喬著『実録・現代短歌史 現代短歌を評論する会』を読むつどいが開催された。その準備のために本書を読み返しつつ、会に参加していた若い日から三十年余という距離を置いて改めて気づくことが二、三あった。

その第一は、玉城徹が提唱した「批評綱領」について。當時は「綱領」という言葉が息苦しくて、政治団体か何かのように感じられた。あとから、白秋の「多磨綱領」かと思いがたつたが、会設立以来の会員岡部桂一郎が「評論通信」に「敵をどこに定めるか？」を書くなど、会員間でも議論になった。

提案された五項目は次のようなものである。

(1) 批評とは何か、何であるべきかという徹底した反省の

ない批評は不可欠である。(例えば、何らかの党派、仲間の利益を優先させたり、歌壇評判記の如き批評は、この反省を欠いたもの。)

(2) その批評者が、どんな文学理論の上に立っているのか、いくら読んでも判明しないものは悪質である。むしろ、一々文学理論から説きおこすわけにはゆかない場合もあるが、読んでゆけば、それが透明に見えてこなければならぬ。

(3) 批評上の用語は、学的な基準が明らかにされていないならばならぬ。「レアリズム」と言っても、どんな意味でのレアリズムかという規定が必要である。自分が主観的にレアリズムをどう考えるかが問題なのではない。幾つかあるレアリズムの規定の中で、自分はどの規定を選んでも、それに、どんな変更を加えたかを明らかにすべきである。この点、現在の歌壇の批評はでたらめに過ぎる。まったく無規定に、わけのわからぬ用語を作り出して論じている。そんな批評を読んでも何もわかってこないのである。

(4) 客観的な文学史、客観的な短歌史を無視して、自分に都合のいいように歴史を作りかえてゆこうとする批評。そんなものは、いずれ馬脚をあらわすにきまっているが、その被害に遭う人も案外多いのである。いずれ歴史が証明すると言って黙過しているばかりもいられないであろう

う。

(5) 相互援助条約型批評。自分と同じ程度の作者を誉めておけば、やがて自分もほめてもらえようというのである。これは昔からある。「情は人のためならず」である。それは無邪気な話だと言うわけにはゆかぬ。これが、案外、腐食が大きいのである。「本年度の秀歌」などというたぐいには、これが、はびこっている。はじめから、低い所に目標を置いて選んでいるのだ。

(2)(3)については、岡部桂一郎がアカデミックすぎるとして反発した。これを、玉城徹から言われると圧迫感を持つ人の多いことは理解できる。しかし、それを除けば、(1)の「自分の利益を優先させたり、歌壇評判記の如き批評」、(4)の「自分に都合のいいように歴史を作りかえてゆこうとする批評」、(5)の「相互援助条約型批評」のような批評はいけない、というような項目は、ごくごく当たり前の要求である。当たり前でありながら、日常に実践していくことのこれほど難しい事柄はない。

いつの世にもこのような姑息はある。しかし、茂吉だって白秋だって、佐太郎だって終二だって、一流と言われる歌人はそんなことはしないものだ、すべきではない、と思われるていた。表だってそういうことをする歌人はひそかに軽蔑された。歌壇の世俗に毒されぬよう身を保つことを、理念の上だ

けでも善しとする歌人たちが、この'80年代にはまだ多く存在していた。というよりも、そういう価値観がまだ崩れ去っていなかった。

しかし、新自由主義によるグローバリズムがしだいに浸透していった'90年代、歌壇の世俗を生きる（本音）が臆面もなく白昼堂々と歩き始めるようになる。建前の体裁すらとりつくる必要が無くなった。勝組負組などという露骨な言葉が流行語になっていった時代である。あれからずいぶん経つから、昨今では批評者本人たちも気づかないほど、ごく自然に「仲間の利益を優先させたり、歌壇評判記の如き批評」「相互援助条約型批評」をしてはいはしないか。

そう思って、若い世代のパネリストたちが玉城さんの「批評綱領」をどのように受け取るのか、意見を聞くのをたのしみにして参加した。

*

玉城徹は、『現代短歌を評論する会』最後の運営委員会で、「何らかの意味で理論的な中核を作らなければいけない、現代短歌の具体的な作品について理論的に批評できる何人かが必要だと考えて」口を出しかけたけれども、簡単にできそうもないことがわかって手の打ちようがなくなつたと述べたという。「批評綱領」(2)(3)にいうような学的基準をはずさない理論的な批評をつくりあげること、いつの世にもあり得る(1)(4)(5)のような俗っぽくて卑い批評を相対化できると考え

ていたのだろう。それがむずかしいことがわかった。

こうして会の中心的存在であった玉城自身、『現代短歌を批評する会』の活動に限界を感じていたことがわかる。

*

のちに玉城さんは、学的基準にもとづいた理論的批評ではなく、普通の言葉による創作者の批評というものを、声を強くして言うようになった。次に引用するのは、「うた」二〇〇号について」（2002.10）の寸言から。

○批評もまた理屈ではない。もともとは、普通の言葉で、十分に事足りるものである。そこから、ある共通理解を旨ざすことができるのである。〈批評学〉などというのは、成立しないし、また、仮に、そんなものを立てても、何の利益もないだろう。

○〈学〉とは、定義された言葉によって、理解を交換し合うものであるが、批評には、そういう手続きは不要である。

○批評という活動は、芸術文学の、ある一部分を言うにすぎない。芸術文学の外に、批評という分野があるわけではない。理屈っぽい言葉を用いれば批評などというのは誤解である。

○大上段に振りかぶるようなものではない。「ここは何ですか。」「どうして、ここは、こうなったのですか。」

という素朴な疑問の心もちが、批評の基本である。作者は、それによって、自分の一歩を進めることができるのである。

○ある芸術（文学）作品を中心にして、普通の人と普通の人とが取り交わす日常会話が批評である。「芸術には、本来主義というものはないと思う。」というようなことを鷗外は言ったが、批評にも主義はないのが、本当である。

『左岸だより』第四十回（2007.12）の後記にも、次のようなエピソードを書く。

○少年弟子の写生して来た小鳥の画を見て、平福百穂は、「もう一度、かいてらっしゃい」と返した。そして、久保田健次（赤彦の子息）の方へ向いて、「健次さん、あれは嘘ですよ。」と言った。これは、立派な批評である。

同じく、この後記に、「批評用語」などと言って騒ぐ者がこの頃いるが、批評したければ日常の言葉で十分間に合う、と書く。また「歌壇評判記のような批評は、もつとも不愉快である。今まで、人があれこれ言ったことを掻き集めて言うだけの話で、それは批評にも何もならない」とも。

玉城徹は「批評綱領」五項目のうち、(2)(3)をいわば止揚し

たのである。理屈っぽいことを長々と述べたようなものが批評ではない。普通の言葉でいえばよい。大切なのは「批評綱領」の(1)(4)(5)。当たり前の要求でありながら、日常に行うこととの至難な事柄の方である。

* 「素朴な疑問の心もちが、批評の基本である」。わかったような事を言ってはならない。相手の気持ちに付度するなど、ふらふらしては、批評はできない。何よりも自分自身の感覚に正直でなければいけない。間違ってもいい。自分の背丈以上の批評はできないのだから。

どんな場合にもそんな批評をしていこうと自らを律してさえいれば、「仲間の利益を優先させたり、歌壇評判記の如き批評」や「相互援助条約型批評」などは、じつは入り込みようがないのである。

* ある年の懇親会での玉城徹の挨拶中の言葉。「やはり今や、批評よりも歌人の魂が問題だろうと思うんです。清らかで深い魂というところから出てくる歌でないと、人の心をうたない。それには、「複」なものが「純」なところまで行かなければ、おもしろくならないように思う」。これは、外塚さんの本の三十九頁にあるエピソードだ。

片山貞美と飲んでるとき、歌はよく単純を尊ぶと言われるが、「単」なるものが「純」ならいいんだけど、じつは「雑」

なものが多いんじゃないかと疑問を呈すると、片山さんは、それじゃ「単雑」の反対は「複純」かと喜んだという。

歌壇的世俗も、いったんそこに入ってしまったら抜き差しならぬ現実である。一筋縄では行かぬ複雑な現実のなかで、赤剥け傷をつくりつつ、何とか「純」なるものへとあがるところから、歌人の魂もふかくなってゆくのだろう。

歌という短い形式は、どういうものか、とりわけて作者の内面、精神風景といったものが敏感にあらわれる。

「批評綱領」の(1)(4)(5)も批評の問題というより、「歌壇評判記の如き批評」や「相互援助条約型批評」から身を遠ざけることこそが、良き歌をつくるための必須条件だからなのである。

* ところで、「八雁」前号の「第四十四号草林集合評」で、次のような私の歌が取り上げられた。

ひしびしと担ぎあぐる手うち払ひ臆^い怖^かりしころおもはざらめや

己が身に下がる櫛^{かん}櫛^{らん}賞^めあふとここにし辣^しき笑^ひはのころ

「偶成二首」と詞書を添えたが、じつは次のような玉城徹の歌を詞書としなかった不親切が、歌の拙さとも相俟って評

者の誤解を招いたようである。

己が身に下されるらんる襪らんる賞めあひて居る幾たりも見ずてか
過ぎむ 「含笑迎春」「香貫」

最近、八雁の京都歌会では玉城徹と佐藤佐太郎を交互に読み合っているらしい。歌会消息によると、今月は『香貫』をやつたとある。ふと手もとにあつたぶ厚い『玉城徹全歌集』をばたんと開くと、ちょうど『香貫』のところが出て、右掲出歌が目飛び込んできた。

「己が身に下されるらんる襪らんる賞めあひて」などというフレーズは、いかにも玉城らしい笑いを含むものである。苦い笑いを胸中に覚えたいではいられない。「相互援助条約型批評」を歌にすれば、このようになるのである。玉城の笑いは、クレソンのように芳しくも辣い。

*

そうして思いはゆくりなくも、わたし自身の辣き体験へと及んだ。たしか、この歌集『香貫』だったはずだが、「短歌新聞」誌上で書評を担当した。「短歌新聞」では著者に書評希望者を数名指名させるのが通例であつたが、いつの頃からか、玉城徹の新歌集が出ると書評を依頼された。たいへんに緊張して、がんばって書く。そのあとには「It's a point.」なんて、賞めてくれているのか、いないのか、頭を捻るよう

な葉書が必ず来たものである。

『香貫』は、良い歌集であつた。こんな実力ある歌人をどうして歌壇はきちんと遇しないのかと少々義憤にかられていくらか書いたと記憶する。そのあと、葉書は来なかつた。そして、以後、書評の依頼は来なくなつた。何にも言わないが、ひしひしと瞋恚が伝わってくる。

担ぎ上げるといつたような気持で書いたのではまったくなかつたが、人にもつと知らしめたいなどという心動きこそがすなわちそういうことなのであつて、歌壇の世俗に足を突っ込んだ不純であつた。身に応えた。

「うた」誌上であつたか、玉城さんは、しばしば自分に弟子はない、自分の名を口に出してはならないと、書いた。自分の名前なんか忘れられてけっこう、三百年だつて忘れられてよい、とも書いた。目につかないところで、あるいはその没後に、自分の名を担ぎ上げようとするものを用心しているのだとわかつた。担ぎ上げるものは、人の名を利用するのである。人を利用しよう、人にぶら下がろうとするのがいちばんいけない、ともしばしば戒めた。それらの言葉を読むたびに、楔を打ち込まれるようであつた。

*

玉城徹は、ときに瞋恚の人であつた。しかし、それは、わが身を清らかにしてくれる瞋恚であることを思わないわけにはいかないなあ——と、というような気持が動いたのである。